

# 日本人のアジアへのかかわりを思い起こそう

第十四回司馬遼太郎賞の受賞者は静岡大学の楊海英教授で、受賞作品は『墓標なき草原——内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録（上）（下）』（岩波書店）であった。この本に早くから注目し、内容の壮大と論証の緻密に圧倒され、周囲の知り合いにぜひ読むよう勧めていた私は、まさにわが意を得た思いであった。

楊教授は内モンゴル出身のモンゴル人で、司馬氏は大阪外語大学モンゴル語学科の出身であり、モンゴルを愛し、しばしば内外モンゴルを旅し、また著作『ペルシャの幻術師』や『蒙古桜』は楊教授の若い頃からの愛読書であったというから、形容は一寸変だが「相思相愛」の、まさに相応しい受賞といえることができる。

楊教授は先月・八月末に発行された第三作になる『続・墓標なき草原』の巻末に、今年二月十二日の司馬氏の命日「菜の花忌」にあわせ催された授賞式のスピーチを収録している。その短文を読むだけでも、近・現代史における日本人とモンゴル人の濃密な関係が思い起こされて肅然とせざるを得ない。

漢族の草原への入植を禁じた封禁制が緩み、また公有の牧地をモンゴル王侯が漢族に売り払ったりしたため、清朝末までに遊牧経済の維持が困難になり、モンゴル族はすでに民族衰亡の一途を辿っていたが、その頃から彼らが出会い、運命の転換を賭けてともに歩いた先進民族が、「太陽の国」（ナラン・ウルス）——日本民族だったというのである。両者はまず日露戦争で「秋山好古らが率いる近代日本騎兵と若き遊牧の戦士たちが満州の大草原で出会い、肩を並べて大国ロシアと戦い、勝ったのです」。

そして両者の協力は満州国建国、徳王の「蒙古自治邦」建設にまで及んだのであるが、楊教授が特筆するのは同時に進められた日本による近代教育の推進で、「その結果、何万人もの高度の近代的な知識を身に付けたモンゴル人たちが育ちました。しかし、このような日本的な近代知識で武装したモンゴル人を中国は忌み嫌い、『日本刀を吊るした連中』として（内モンゴルの文化大革命で）大量虐殺の対象としました。これは、モンゴルと日本の悲劇です」。

戦前、戦中、日本に協力したため、戦後になって同胞から迫害を受ける人々のあることを耳にしてきた。しかしこの内モンゴルの、中国建国以来継続する「対日協力」に対する迫害は、文化大革命をも隠れ蓑に、その大規模なこと、残忍なことは類を見ない。楊教授は続巻の冒頭で「本書の流れ」を要約して「文明は太陽の国から、殺戮は漢人の国から」と言い切っている。日本を評価し、日本を選択したがゆえに苦境にあった人々、今も苦境にある人を、少なくとも思い起こそう、それが明日へのつながりを残すと、強く思わされるのである。

（二〇二一年九月六日）

政治学者 殿岡昭郎